研　究　成　果　報　告　書

2026　年　4月　6日

１．所属・職・氏名　等

共通教育センター　教授　日向良和

２．研究課題（テーマ）名

「大田堯資料アーカイブ」（本学の授業全般の改善に関する研究領域）

３．研究期間

2024 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

４．利用した研究費の種類及び金額

重点領域研究費：1,078,570 円

５．研究の概要

本研究は 2024 年度から 2 年度の研究として、都留文科大学の教職研究に対して、教育学において重要な成果をのこされた大田堯元学長の資料を収集、保存、公開をおこなうことで、今日的な教育課題の解決にも資する基礎資料となることを目指し研究をおこなった。

初年度の 2024 年度はデジタルアーカイブ学会でのプロジェクト発表をおこない、大田先生ご自宅資料の確認と、移管の打ち合わせを資料管理をおこなっている方と繰り返した。またスキャンのための機材を購入した。これにより、大田先生の資料の大まかな全体量を探ることができ、都留大に移管する資料群の特徴を見ることができた。大田先生のご自宅にある資料は、大田先生の主に 50 年代から亡くなる直前までの研究、講演資料が集まっており、教育学の泰斗である大田先生の思想などの軌跡を探るための資料であるということが発見できた。

2025 年度は機材のセットアップとスキャニングの試行をおこなった。さらに、邊見先生を通じ、東大教育学部に保管されていた大田先生の資料を知らせていただき、移管の手続、資料の移動をおこなうことができた。大田先生は東大での研究の中で特に地方の学校での教育活動を通じて、地方児童の 50 年代当時の姿や作文などから見える感覚などを感じられる資料を発見することができた。また 2025 年末になるが、大田先生のご自宅にあった都留文科大学の学長時代に学生にインタビューしたテープと文字起こしされた原稿が発見された。これらの資料は 80 年代の都留文科大学の学生の生の声であり、本学の教育目標が確立されていく中でのその根拠となる資料と考えられる。

2 年度の研究を通じて、大田先生の教育学における位置づけとその思想を改めて確認することができ、その根拠となる資料の保管に着手することができた。今後資料の分析とデジタル化を中心とした保存、公開を進めていきたいと考えている。

６．研究成果等

２０２４年度はフィールドミュージアム棟への寄贈受け入れ準備と、デジタルアーカイブ化のための機器整備をおこなった。

寄贈受け入れ準備については下記日程で太田堯先生の自宅を訪れ、現在の資料整理をおこなっている方と、寄贈として受け入れる資料の選定、および量を調査した。

訪問日時

２０２４年５月２日　大田堯先生自宅訪問（JR 武蔵野線東浦和駅）北垣先生、邊見先生、日向

２０２４年８月１日　大田堯先生自宅訪問（JR 武蔵野線東浦和駅）北垣先生、鈴木健大先生、日向

２０２４年９月１９日　大田堯先生自宅訪問（JR 武蔵野線東浦和駅）北垣先生、邊見先生、堤先生、日向

２０２４年１２月２４日　大田堯先生自宅訪問（JR 武蔵野線東浦和駅）北垣先生

2025 年度は、主に東京大学教育学部に保管されていた大田堯先生の資料（段ボール 30 箱）の搬入および、予備的な整理作業をおこなった。年度明けてすぐに東京大学側との折衝および調整をおこない、8 月に北垣、原田、日向の 3 名で東京大学を訪れて段ボールに資料を箱詰めし、フィールドミュージアム棟に送付した。

送付した資料については、開封後、個別資料の封入されている封筒の表紙などを手がかりに、資料リスト（第 1 次）を作成した。このリストを見ると、1950 年代から 1970 年代にかけて大田先生がおこなった調査や実践の一次資料が発見された。これらの資料を概観すると、大田先生のロハ台活動に見られる地方での教育活動の実践や根拠となる資料となるのではないかと推測できる。これらの資料が発見でき、今後社会に還元していくべきであるということを確認することができた。

10 月以降は、大田先生のご自宅に保管されている資料の送付について調整をおこなった。現在資料を管理されている方と打ち合わせをおこない、先行して都留文科大学に関連する資料（例えば学生に対してインタビューしたテープと文字起こしされた原稿など）などを送付いただいた。

また、資料保管について保管ボックスを選定した。その上で資料を段ボールから保管ボックスに移し、乾燥剤、防虫剤を封入した。ボックスは半透明であり、内部資料がある程度見ることができる。

来年度以降、資料の分析と公開を進めていき、教育学、教育史の基礎資料として学生へ還元していきたい。日本の戦後教育、特に高度経済成長時代の地方部での教育状況や都市部とのギャップを研究する際には必須の研究資料となるのではないかと考えている。

また、AI 時代を迎えて、AI にさまざまな教育相談をおこなう学生などが増える中で、AI の学習する資料（RAG）資料として利用することで、教育とは何かという点を現代的に継承できると考えている。

7．研究の実績（論文・発表　等）

2024/9/26　デジタルアーカイブ学会 産業とデータ・コンテンツ部会第 26 回 DA ショートトーク／産業のシーズを見つけよう！にてプロジェクト着手について報告

2025 年 11 月の図書館総合展にてプロジェクト着手および進捗について報告